地域の医療の担い手を、地域との連携で育てる『地域「里親」による学生支援プログラム』

医療情報部教授　永田　啓
社会医学講座准教授　垰田　和史

医療情報部教授　永田　啓
社会医学講座予防医学部門准教授　垰田和史

文部科学省の「平成19年度新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に、地域の医療を担う医師・看護師の育成をめざす地域参加型学生支援事業『地域「里親」による医学生支援プログラム』が採択されました。深刻化する地方の医師、看護師不足を解決するために、地域で活躍している同窓生だけでなく、地域に暮らすみなさんにも協力をお願いして、さまざまな支援を行ないながらその成長を見守っていこうというものです。

プログラム立案の背景
～不安や悩みを抱える医学生たち

今、地方では医師や看護師不足が大きな社会問題となっています。臨床研修医制度の導入で首都圏に研修医が集中する傾向が強いこともあって、地域の医療を担う医療従事者の育成が大きな課題となっています。

滋賀医科大学でも地方特別選抜を早くから導入したり、地域の福祉施設や医療機関と連携して学生教育に取り組んできました。そのような取り組みの中で、今の医学生たちの多くは、医学を学ぶことや医療人としての将来にさまざまな不安を抱えているものの、身近に相談できる相手がいないことがわかってきました。

県外から滋賀県にやって来て、不慣れな土地で一人暮らしを始めた学生の中には、何か困ったことが起こっても気軽に相談できる相手もいないケースも少なく有りません。また卒業後、地方にとどまっていたのでは、最先端の医療から取り残されてしまうのではと、不安を抱く学生が多いことも確かです。

そこで今回、県内で活躍している卒業生と県民のみなさんの協力を得て、「里親」として医学生の身近なサポーターになっていただくことで、地域の医療の担い手を育てるプログラムを企画しました。

地域に医師、看護師を残すためには、まずこの地域を好きになること、自分を理解してくれるサポーターや、頼れる相談相手がいることが大きな要因となります。

同窓生のみなさんには里親として、不安や悩みに対する相談にのっていただいたり、進路相談や実地研修などを通じて、県内で医療に従事する魅力や、地方にいても十分必要な情報を得られることなどを伝えていただくようにします。

また、県民のみなさんにもプチ里親として参加していただき、地域の生活や文化にふれる機会を設けたり、医師不足への不安など生の声を伝えることで、滋賀県への愛着や地域の医療への意欲を育てることにつなげていきます。

取り組みの独自性
～地域と大学が協力して学生を支援します。

本学を除いて、県内で働く同窓会の医師（624名）と看護師（139名）の中から、プロジェクトの趣旨に賛同する同窓生を「里親バンク」に登録、関心のある診療科や所属クラブなど学生の特性とマッチングさせて里親を選出します。

またプチ里親は、病院ボランティア（50名）、模擬患者ボランティア（20名）、献体組織「しゃくなげ会」の会員と家族（1345名）に協力を要請するほか、このプログラムの興味を持たれた方にも参加していただいて、学生との交流組織を立ち上げます。

学生と里親、プチ里親の交流は、まずインターネット等を通じてメールのやりとりを行なうことから始めて、春夏冬休みには里親を訪ねて交流を図ります。

また、1年次の「医学概論Ⅰの早期体験学習」、4年次「自主研修」「社会医学フィールド実習」、6年次「学外（地域）臨床実習」などのカリキュラムでも、「里親」や「プチ里親」の下で長期体験実習が行なえるようにするほか、里親、プチ里親が講師として全学的な教育にも関わる機会を設けるよう工夫します。

「里親」学生支援室を立ち上げ、サポート用のWebシステムを整備して、里親、プチ里親と緊密な連携を図り、必要なFD（Faculty Development＝資質向上）研修を大学やインターネット上で行なうなど支援を行なっていきます。

さらに、交流回数や交流の内容のほか、学生に対しては得られた成果、感想、要望などを、里親、プチ里親には学生、本学への要望などを調査して、次年度の支援内容に反映させます。また、学生たちの「地域の医療への関心度」が向上したかどうか効果を調査して評価します。

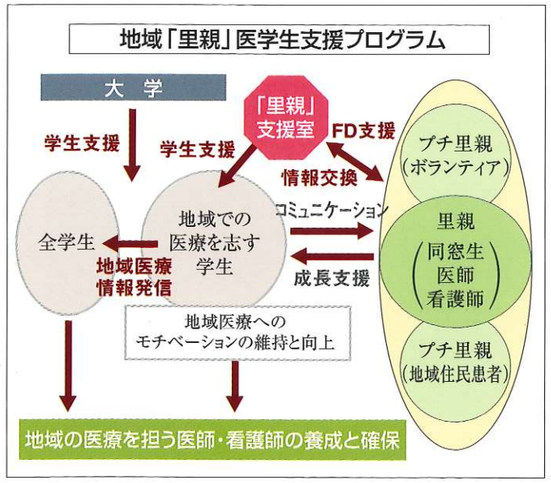
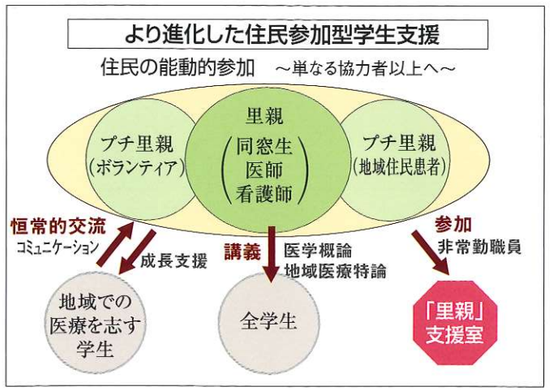
期待される効果
～交流の中から地域医療への意欲を育みます。

この取り組みによって期待されるのは、「里親」「プチ里親」との交流を通じて、滋賀の地域性を理解し、地域の医療への関心を高めてもらったり、県民の医療に対する思いを理解できるようになることです。

医療に携わる者には、コミュニケーション能力や人間関係における豊かな経験が求められますが、残念ながら現在の医学・看護教育ではこうした経験を十分に積むことができません。また、社会全体の人間関係が希薄になって、若者の多くは対人コミュニケーション能力が未成熟だったり、社会性が欠如していることなどが問題となっています。

プログラムでは、里親、プチ里親とのコミュニケーションを、若者にとって比較的抵抗のないメールからスタートして、対面型コミュニケーションへとステップアップする中から、医療人として必要なコミュニケーション能力や社会性を養います。

里親やプチ里親との交流を通じて、学生たちは自分が将来どんな医師になりたいかをイメージしながら、モチベーションを高めていくことでしょう。「地域でがんばって期待に応えたい」そんな医学生の心意気を大切にしながら、医学部をめざした原点を問いかけていくことにもつながります。

また、そういった学生に地元からの熱い思いでサポートしていくことをアピールしたり、現在の医学教育の現状を県民のみなさんに知っていただくきっかけにもなります。

優れた地域の医療の担い手を時間をかけて、県民のみなさんといっしょに育てていこうというこの取り組みには、地道な積み重ねが必要になりますが、将来を見据えた地域への医師供給体制と位置づけ、学内全体に取り組みを広げる機会を作っていくことで、全学的な財産にしていきたいと考えています。